

ハンドボール競技における動感志向性に関する一考察

— 遅攻でのバックコートプレイヤーに着目して —

丸井 一 誠¹⁾ 明石 光史²⁾ 田中 守¹⁾

A study kinesthetic intentionality (intentionalitemotrice) in handball games:
Focusing on player in the backcourt during a slow attack

Kazumasa MARUI¹⁾ Koji AKASHI²⁾ Mamoru TANAKA¹⁾

Abstract

This study, focused on kinesthetic intentionality (intentionalitemotrice) during a slow attack in a handball game, and it is intended to represent the semantic core and kinesthetic sense (kinästthese) through universalization via classification, while also incorporating a method for analyzing kinesthetic sense (kinästthese).

The method used in this study was to present phase structures before filling out a questionnaire form, whereby the players were requested to recall and recognize their own kinesthetic sense (kinästthese) in relation to the above phases. Subsequently, multiple analysts each subjectively integrated the players' descriptions into the questionnaires using the forms to describe their kinesthetic sense (kinästtheseform), and then the athletes' kinesthetic (kinästthese) was analyzed and systematized from an overall perspective.

Various issues related to the analysis of kinesthetic sense (kinästthese) were thus suggested through a specific method for analyzing kinesthetic sense (kinästthese).

I. はじめに

スポーツにおいてプレイヤーは身体知をよりどころとし、次々と変化する状況の意味構造を瞬時に感じ取り、自分の動きを先取りして適切な動きを行う。競技力の高いプレイヤーが状況を打開する動きは、まるでメロディーが奏でられるように、鮮やかであり、なおかつ軽快な動きにわれわれは魅せられる。このような動きに対して、多くのプレイヤーや指導者がその動きかたのコツや、その

プレイヤーがどのように志向し、何を感じ取っているのかということに興味をもつことはごく当たり前のことといえよう。実践の場では目的に対して何かを意識して動こうとする^(6 206頁)、動感志向性が主題化されているにもかかわらず、これまでのスポーツ科学の分野では、客観性を含む法則的原理をもたせ、外からだけ観察された運動形態や動作に着目した精密科学的運動分析が主流であった。この客観性の原理を求める余り、人間本来の生き生きとした運動現象は完了した対象物の移動

1) 福岡大学スポーツ科学部
Fukuoka University, Faculty of Sports and Health Science
2) 福岡歯科大学
Fukuoka Dental College

として、数量化されて置き換えられてきてしまった。本来、実践の場で大事にしているコツやカンなどの「動く感じ」は非科学的であり、主観的で妥当性に乏しいものとされ、研究の分野からは捨象されてきた。つまり人間本来の生命的な動きかたが捨象されてきたといえよう。人間は意味系や価値系に深くかかわりながら意思や主体性をもって動いているのであり^(5 187頁)、常に自分の身体をよりどころとして今に生起しており、決して物体の移動ではないということは誰もが周知していることである。また外からだけの客観的な観察分析をすることや、今に生起していない完了した運動をいくら分析しても人間の動きかたの根原的な核については明らかにできないと思われる。このような現状のなかにあって、実践の場で主題化されている動感志向性に関する研究は少ない。

さらに今ここで動きつつある本人の動感志向性について明らかにすることの重要性はさることながら、普遍化して共鳴できる動感志向性についても明らかにする必要がある。なぜならば一個人の主観だけでは固有性があり、普遍化するに至らないものであると一蹴されかねないからである。そのためには自己と他者に共鳴して通底する根原的な共通の動感意識を類比して解明することも重要なことである^(7 116頁以下)。

そこで本研究では、ハンドボール競技における遅攻の動感志向性に着目し、意味核と動感意識を類的普遍化して表すとともに、大局的に体系化する動感分析の方法について検討することを目的とした。つまり、プレイヤーはどのように意味づけや価値をもって動こうとしているのか、そしてそこでは何を意識して動こうとしているかを明らかにし、分析方法について検討するということである。方法として、複数のプレイヤーの記述と日頃のプレイヤーの動感志向形態から指導者同士が、間主観性に基づき、プレイヤーの動感志向性を見抜き、大局的に体系化していく。とりわけ攻撃を組み立てる主要なポジションであると思われるバックコートプレイヤーに着目して考察する。

II. 動感志向性の意義

1. 意味と価値を前景とした動感意識

われわれは日常的に行っている動きは特に何か意識しているわけではなく、無意識的に自動化されている故に、なかなか言葉では伝えきれないことがある。それはスポーツにおいても同じことがいえよう。例えば、ゲーム状況においてプレイヤーは対峙した場面を把握してから考え、こう動こうとするのではなく、体が勝手に動いてしまっている感覚であったり、「ボールを投げる」という動きについても、投げる本人が目的を見出さなければ、何かをポイントにして行っていることを説明することは難しい。つまり、習慣化された動きにおいては特に「何を意識しているのか」ということが顕在化されにくく、深層に沈んでしまっており、何を意識していたかを問われても他者にうまく伝えることは容易ではない。つまり動感志向の構造は顕在性と潜在性の二面性をもっている地平構造を形づくっている^(7 139頁)といえよう。何かをポイントとして動こうとする感じはインタビューや記述の方法を用いても、何かもどかしく、取り残した感じがあり、すべてを表しきれるものではないことを前提にしなければならない。何かを目的に運動するということは状況の意味と動きかたの価値意識に関わりを持っており^(6 10頁)、意味系と価値系に切り結んだ動感意識が生き生きと時間化された地平構造に胚胎している^(7 260頁)。

本研究の主題ともいえる動感志向性は、人間の運動におけるもっとも根原的な意味核をなす動感身体教育の本質であり、「目的に対して何かを意識して動こうとする」ことであり、未だ実際に起こっていない未来への運動 投射機能 を動感運動に含意させるものである^{(6 206頁)(6 308頁)}。さらに動感意識とは、私個人の身体性のなかに息づいている「動いている感じ」で^(6 24頁)、今ここで動こうとするときのポイントであり、意識していることである。自己の動きに自我身体に向き合う意識と目的をもつプレイヤーにおいては、常に今この状況に対し意味と価値を瞬時に見出し、動感を研

ぎ澄まし、意識を統覚化して動きをつくっていくことは通常的なことであると考えられる。

2. 動感意識に関する根原的な特徴

運動のかたちは「今ここで私は動ける」という私自身の動感に支えられ、たえず変化を続けながら、全て一回性原理に支配され、一回ごと、すべてに違いというものが認められる。全く同一の形態というものは存在するはずもない^(5 258頁)。例えばハンドボールの“ワンマン速攻”では、自陣から走りこんでいるプレイヤーにボールを出し、捕球してキーパーとの1対1の状況が発生する。ボールを捕球してシュートへ向かうプレイヤーに着目すれば、「周界の動きを先読みし、状況に応じながら走って捕球し、シュートまでもちこむことができる」という動感に基づいて運動形態が表出される。すなわち“ワンマン速攻”という現象そのものに対して一回ごとに動感意識も状況も異なる原理が認められる。つまり、同じ人物が同じ現象に対して同じように動いたとしてもそこには一回ごとに異なる状況に伴う動感意識を有しているのである。しかし、一回ごとの動感意識が異なれば動きの核も異なるかといえ、そうではないと考える。そこには原象^(註1)に即しながら、自己の身体知に基づいてシンボルを統覚しており、類似的な意味核が内在されているものだと思われる。つまり、ワンマン速攻という現象をシンボル形態として捉え、そのなかで私が持ち合わせている動感を典型的な状況に転化して、今この状況に応じて予想的または即興的に動きを組み合わせていると考えられる。そこには原理となるシンボルの意味構造をとらえると同時に、状況感によって裏打ちされた動感志向形態を見出さなければならない^(7 187頁)。

動感意識を分析する動感分析においては、状況の意味を読むことと、状況の感覚を把握することの両義性を含む立場を放棄してはいけない^{(5 272頁)(7 42頁)}。プレーする際には今までに出会った類似している自己の動感意識を再び今ここに呼び起こし、何をしたいのか、何ができるのか、ど

うすべきなのかという状況判断と動感能力が求められる^(7 52頁)。遅攻の場面を想定し、ゲーム感を引き寄せ、ゲーム全体の状況を流れつつある自分自身の動きとして感じ取り、再認化することが大切である。つまりシンボリック意味構造を背景として前に出会ったことと類似している動感意識をふたたび今ここで直接感じ取ることが動感志向性を明らかにするうえでは大事であろう。

そこで本研究の目的である遅攻でのプレイヤーの動感志向性を明らかにするには、始原身体知の領域である時間性を含ませた意味や価値を前景として、とりわけ自我中心的な作用で姿を現すコツと状況投射化作用が前景に立つカンの二領域において、自我身体に問う必要性がある。カンとコツの相互的特性は、回転ドアの原理が働き、統一的二重性が含まれるが、どちらか一方だけの立場だけを分析するわけにはいかない^{(7 25頁)(7 169頁)(7 205頁)}。そしてコツには自分自身の動きの先取りが含まれ、カンも同様に味方や相手を含めた対峙した状況との関わりかたの先読み統覚能力を必要とし、いずれも私的な固有性がある。例えばハンドボールでのオフェンスの1対1での突破局面を取り上げると、周界の切迫した状況下で即座の判断と選択を行い、誤った先読みをさせようとするフェイント行為がしばしば観察できる。そこでは自分が体感してきたことと今を感じとれる始原身体知を抛り所として、習練してきた身体のさばきかたなどの自我中心的作用と、原則原理に基づいた自己のシンボリック意味構造に基づく状況投射化作用が差異化現象をもって、動きとして現れる。そこには未来の志向形態として自我中心のかつ状況投射的な先読みが含まれる。

上述した点を踏まえ、動感志向性を紐解くには、まずもってプレイヤーは「今ここで私は動ける」という自我身体を中心とした動感を土台として、また分析者は代行的にプレイヤーの運動としてとらえて「今ここで私は動ける」という自我身体を中心とした動感を土台として分析することが不可欠である。

3. 他者と自己の動感との擦り合わせ

「今ここで私は動ける」という固有性を有する主観性と私秘性を含む動感意識だけでは、根原的な類核に迫っていくには信憑性に乏しいと思われる。そこで私の動感を越えて、他者の動感とを擦り合わせ、共有していける類核を普遍化していくことが運動指導実践においては大切であると考える。金子^(6 51頁)は「単に 私が動ける という自己運動の段階から他者と動感意識を共有できる間動感的な身体知という普遍化の段階まで要求されるのが運動指導実践の領域である」ととらえている。例えばストライドフェイントができるプレイヤー同士で、その足の運びかたや擬態語で表せられる動感リズム、ストップのしかたの動感意識は、自己の動感を越えて、超越論的な普遍性に支えられながら共鳴しあえる共通項としてお互いにもっている。この共通項と呼ばれるものが間身体性に基づく根原的な共通の動感意識であり^(7 116頁)、間動感身体としてとらえることができるものである。そこには共現在化が働いており、自己と他者はそのあいだに同じく時間化されている動感志向性の共同の場を持つようになる^(6 335頁)。フッサー^(2 195頁以下)は相互主観性を 地 にして「類比的統覚」が働いているとも表現している。また金子^{(5 213頁)(7 108頁)}は、われわれは運動形態に住む内在的な志向体験を超越論的地平に引き出して、私一般のコツやカンとして高め、共有できるようにしなければならないと述べている。実践指導の場に居合わせる指導者は各プレイヤーの動感を読み解き、各プレイヤーに見合わせて促発していかなければならないし、またプレイヤー同士がある運動形態に対して動く感じを共有することができる。そこには人と人を越えて共有できる動感があるといえよう。

そこで動感志向性を類的に普遍化するには、プレイヤーだけの動感志向性に関する記述だけでなく、分析者が動感を代行し、プレイヤーの動感志向形態から読み取ることが必要であると考え。なぜならば、記述だけではプレイヤーが書き表せられなかったり、文章だけでは読み取れないもの

があるからである。それらを現場に携わる分析者ならば、自らの身体を用いて代行的に意味と価値を瞬時に嗅ぎ分け、プレイヤーの動きから何を意識しているかを見抜けるものである。代行的に見抜ける資質は類的に動感を普遍化していくことにおいて欠かすことができない。本研究では現場に携わる分析者らによってプレイヤーの記述と動感志向形態の両面から擦り合わせて動感志向性を明らかにしていく。

Ⅲ. 方法

1. 研究方法

アンケート型の集合調査法を用い、動感志向性を明らかにするために適していると思われる質問項目に対して記述方式で回答してもらうようにした。アンケートを記述する前には、プレイヤー全員に「ハンドボールの遅攻での自分自身の動く感じや意識について明らかにしたい」ということを述べ、ハンドボール競技の一般的な遅攻の局面構造を呈示した。そして「各局面において自分がどうあるべきかという目標像についても加えて明らかにしたい」ということも付け加えた。プレイヤーにはアンケートの質問項目から各局面での自分自身の動感意識を今に呼び起こし、再認化^(7 67頁)して記述してもらった。各プレイヤーの記述と動感志向形態を基に、分析者同士で間主観的に擦り合わせながら、大局的にとらえ体系化していく。

シンボル化するディフェンスは普段多く練習している自チームのベースディフェンスといえるチェンジ系の6 - 0ディフェンスとし、遅攻のシステムはポジションチェンジ・システムチェンジを含まない3 : 3システムのポジション攻撃について再認化してもらった。

2. プレイヤー

プレイヤーはF大学の女子ハンドボール部員のバックコートプレイヤー7名を対象とした。各プレイヤーの学年とハンドボール競技経験およびF大学の戦績は表1、表2に示した通りである。

F 大学は全日本学生ハンドボール選手権大会に毎年出場するチームであり、バックコートプレイヤーはスポーツを専攻する学生である。さらに F 大学には、高等学校時から全国大会でも上位の成績を得たチームの多い地域からの入学者が多く、いわゆる競技力の高いプレイヤーが集まってきている。その競技力は指導者同士の間主観性に基づいてプレイヤーの動感運動を代行的に観察分析すると、習練的自在性を含む運動であると読み取れるので自在化位相^(6 66-67頁)にあると考えられる。

表 1 各プレイヤーの学年と経験歴

	学年	経験歴
プレイヤー①	3	11
プレイヤー②	3	6
プレイヤー③	3	6
プレイヤー④	2	13
プレイヤー⑤	2	8
プレイヤー⑥	1	4
プレイヤー⑦	1	3

表 2 F 大学の戦績

	春リーグ	西日本インカレ	秋リーグ	全日本インカレ
2005	1位	ベスト4	2位	ベスト16
2006	2位	予選リーグ2位	2位	ベスト16
2007	1位	ベスト4	2位	ベスト16

表 3 分析者の運動経験年数

	運動経験		
	プレイヤーとしての経験歴	その他の競技歴	ハンドボールの指導歴
分析者①	6年(大学、大学院)	野球(中学1~3年) 陸上競技 長距離(高校1~3年)	25年(F大学男子・女子チーム) この間、全日本女子ジュニアチームコーチ4年、 全日本女子学生チームコーチ2年 (財)日本体育協会公認 ハンドボール上級コーチ
分析者②	16年(中学、高校、大学、 大学院、社会人を含む)	水泳(小2~6年) 空手(小2~6年)	F大学男子6年(小学生のクラブチーム2年を含む)・(財)日本体育協会公認 ハンドボール指導員
分析者③	11年(高校から大学・大学 院・社会人を含む)	バスケットボール(小学 4~6年, 中学1~3年)	4年(A大学男子2年、F大学女子2年、小学校 のクラブチーム4年を含む)・(財)日本体育協会公 認 ハンドボール指導員

3. 分析者

分析の際には、動感志向形態に共鳴し、共感する能力が求められ^(7 197頁)、当然ながら動感分析では厳密性を保つために分析者自身の個人的な身体知に頼ることになる。そこでは自己性と身体性に根を下ろした、生き生きと息づいている動感志向性を基柢として、分析しなければならない^(7 198頁)。つまり、分析者自身の身体知で代行して「私が見抜くことができる」ということを持ち合わせて共鳴しなければ、分析はできないといえる。そこで分析者の身体知としての一指標ともなる運動経験年数を表3に示した。

4. 調査期間

調査期間は、大学生が最終目標に掲げるインターカレッジを終えて、新チームでの活動が始まった準備期にあたる平成19年2月18日(日)とした。

5. 質問内容

「各局面における目標像（どのような状態が望ましいのか）はどのようにもっているか。」

「各局面で何を意識して、何を考えているか。そのときの動く感じはどのような感じであるか。」

IV. ハンドボールの遅攻に関する概念

1. 局面構造と局面化能力

ゲームの空間的・時間的な経過に典型的に観察される攻防の特徴的な部分をゲーム局面という。各局面にはさまざまな戦術的な要求が課せられ、各局面の連続体がゲームとして見なされる^(14-80頁)。ハンドボールの局面構造は一般的に、オフェンスは速攻と遅攻、ディフェンスは速攻に対する帰陣と遅攻に対する防御に分けられる。さらにボール獲得・喪失・反則によって攻防を結びつける「切り換え」局面に分けられる^(15-49,51頁)。遅攻に関しては、動きかたに力点を置くと「ポジションに着く 位置取り きっかけ 継続 突破 シュート」の6局面に分けられる^(14-90頁)。なお、きっかけ局面では、3つの経過が確認され、一つはそのまま継続局面を経て突破局面に移行する経過と、二つにきっかけ後に一回のパスで突破の状況へ向かう経過と、三つにきっかけがそのままシュートに結びつく経過がある^(13-66頁)。

図1は遅攻の局面構造を示したものである。しかしながら、あくまでも典型的な局面構造であり、内的体感時間、いわゆるゲームの空間的・時間的な経過把握や分化できる能力は個人で異なる。つまり典型的な局面構造を持ち出す前に自己の時間性を含む動感意識がどのように構成されているのかが前景に立てられる^(7-66頁)。優れたプレイヤーは典型的な局面構造よりもさらに細分化して身体で捉えている可能性もあるといえよう。個人の局面化能力や時間化能力を考慮して、動感志向性について考察する必要性はあるが、身体中心化された動感運動は間動感的に共現在化が働き、自己と他者はそのあいだに同じく時間化されている動感志向性の共同の場を持つようになる^(6-335頁) のであ

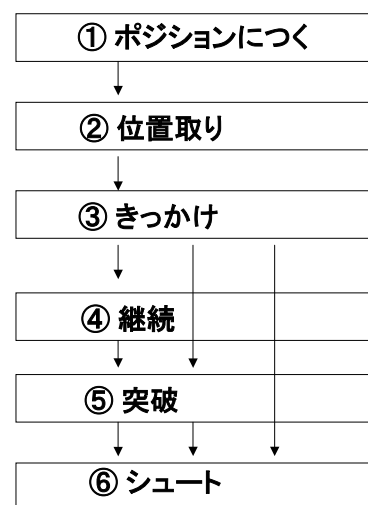
る。類的に動感意識を普遍化していくことを目的としている本研究では、自己と他者の間に同じく時間化されている共通の地平で共有していかなければ、間動感志向性を明らかにすることはできないと考えたので、今回は個人の局面化能力と時間化能力を考察の対象外とした。

2. F大学の遅攻の戦術構想

チームスポーツでは、チームとしての戦いかたが大きく勝敗に影響する。それ故、コーチはある戦術構想にもとづき、想定される敵の戦法を勘案しつつ、さまざまなゲーム条件と具体的な状況の進展を考慮に入れてなければならない^(1-75頁)。

チーム戦術はどのように数的優位をつくることや、どのようにオープンスペースをつくり得点に結びつけるかなど、目的を達成するための具体的なチームの方向性である。チーム戦術を構成している核となるのは個人の動きであり、横着なスタンドプレーを除いて、秩序ある集団の連動現象として表出される。各個人の動きが全体の動きとして、どのように律動的に動いていくのかがチームの課題になる。佐藤^(16-89頁)はそれぞれの運動感覚を「我々の運動感覚」まで高めておく重要性を主張している。そこには個人が戦術原理の基本を等

図1 遅攻の局面構造



しく理解することが前提になり^(1 67頁)，チームとしてのどのように動くのかというような「共通の基盤」^(16 89頁)のものに成り立つ。またゲーム全体の状況を的確に判断する能力や，敵や味方の多彩な変化に即座に対応できる運動能力は全ての現象身体の織りなす運動感覚世界にあるはずであり，それらは単に個人に関わる技術はチームの戦術に

も深く絡み合っていて絶縁的なものとしては考えられない^(5 234頁)。

そこでF大学の遅攻の基本的な戦術構想と，ゲーム局面に基づいて個人の動きかたとして大事だと指導者同士共鳴して，指導している点は表4の通りである。

表4 遅攻でのチームの戦術構想と個人の動きかたに対して強調して指導している技術・戦術

<p>●遅攻でのチームの戦術構想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チームとしての“狙いめ”とチームのなかでの個人の動きを共通理解して律動的に動く ・相手チームのディフェンスに対して広く厚い位置取りをする ・ポストはブロックからの位置をとって主導的に動き、バックコートプレイヤーはポストの動きに対して合わせる ・ボールの流れに対してディフェンスを裏切る“切り換えし”を時折入れる <p>●各局面において強調して指導している個人技術・戦術</p> <p>ポジションに着く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・味方の位置取り、チームとして行う攻撃の組み立てかた(パターン)、相手チームのディフェンスシステムに応じて、素早くポジションに着く <p>位置取り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボールをもらう前の走りこみと次のきっかけの局面への準備を先取りして行う ・ボールをもらう前の1・2歩で加速する <p>きっかけ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボールと相手の両方を視野に入れて、ディフェンスから“半身ずれて”走りこむ ・突破するための“空中キャッチ”を心掛ける ・ボールをもらった瞬間に動く <p>継続</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フリースローで相手にボールの流れを“断ち切られる”前にパスで“さばく” ・ディフェンスを揺さぶるために早いパス回しを行い、そのパスに対する準備と走りこみ <p>突破</p> <ul style="list-style-type: none"> ・揺さぶったディフェンスに対してずれて走りこんで、ディフェンスの動きを感じて、踏み込んでいく ・突破のためのフェイントの足運びとリズム ・フェイントのときは相手よりも常に優位な位置取りと嫌がる走りを意識し、主導権をもっておく <p>シュート</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミドルシュートはジャンプクイックシュートの徹底(0・1で打つ、ためずに早く打つ) ・下を意識して打つ(ミドル・ロングシュートは端だけでなく、端をとりにいくキーパーの股下もねらう)
--

V. 結果および考察

各局面での目標像と動感意識についての各プレイヤーの記述については（資料2）、（資料3）に示した。記述の結果から「ポジションに着く」、「位置取り」ではボールを持っていない動きかたを主題として、「きっかけ」、「継続」ではボールを持っている動きと持っていない動きかた、「突破」、「シュート局面」においては、ボール持っている動きかたについて明らかにすることができた。また自在化位相に至っていると考えられるバックコートプレイヤーの動感意識は、各局面において差異化現象が示される傾向が強く、自我中心化作用もしくは状況投射化作用のどちらか一方だけが作用しているということは少ないと確認することができた。さらに遅攻での動感作用として、味方、とりわけポストプレイヤーの位置と今ここに対峙する自分自身をマークしている相手の状況を把握しようとしている。そして自分の動きかたを投企し、チームとしての“狙いめ”，つまり「共有の基盤」のなかで、ポストプレイヤーやバックコートプレイヤー同士のコンビであわせることを共有しながら、その瞬間の状況を予描的または反射的に感じ取り、主導的に動こうとする志向性の傾向が読み取れた。

記述からプレイヤーが目標像と動感意識の意味をしっかりととらえられず、記述では表現しきれ

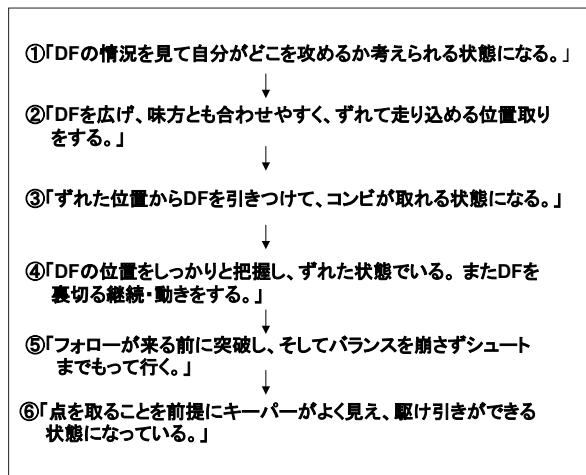


図2 各局面での目標像

ていないと感じ取れた。そして動感意識については具体性にはやや乏しく、個別性が顕在化された表現があると考えていたが、読み取りにくかった。また、記述からでは選択肢や先読みについてまで明らかにすることはできなかった。その要因として質問項目の内容が抽象的過ぎてプレイヤーの理解を困難にしたことや、きっかけからシュートまでの局面での一連の流れが力動的かつ、一気に流れるために細分化して記述することは容易ではないと考えられる。今後の課題として、記述によって意味や価値、または動感意識を確かめようとする際には、分析者同士でより厳密に推敲を重ね、さらにプレイヤーと分析者との間で「共通の言語認識」とを擦り合わせて、具体的な質問項目を設けていかなければならないと思われる。

なお、記述の内容には個人差が見られ、経験年数や競技レベルの高いプレイヤーほど、多くの視点から詳細に記述されていた。

資料1、資料2の記述の内容から各プレイヤーの動感志向形態を踏まえ、各局面を分析者同士の間主観性を基づいて、動感分析をした過程を以下に示す。そして大局的に体系化した目標像や動感意識は図2、図3の通りである。なお、各局面のチーム及び個人の動感志向形態が典型的に現れている一場面を写真1から写真6として示した。

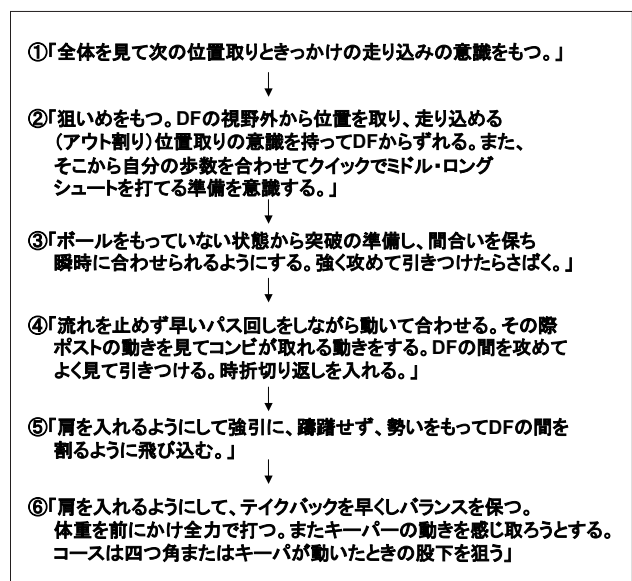


図3 各局面での動感意識

1. ポジションに着く局面

写真1は「ポジションに着く局面」における動感志向形態の典型的な一場面である。攻守が切り換わり、遅攻になりうる局面では、まずポジションに着くことになる。攻撃は一般的にバックコートプレイヤー三人で攻撃を組み立てる3:3システムと、ゴールに対して背を向けるポストプレイヤーが二人はいり、バックコートプレイヤーが二人の2:4システムとがある。自チームの攻撃システムをもとに、バックコートプレイヤーは、相手チームのディフェンスのシステムや対峙する相手ディフェンスの状況を把握しなければならない。

動感意識としてディフェンスの状況に基づく、チームとしての攻めかた、つまり共通の“狙いめ”の確認とその狙いめに沿った自分自身が持ち合わせている攻めかたを投企することが読み取れた。そこには位置取りときっかけ局面への“走りこみ”の動感意識が強く作用されている。

2. 位置取り局面

写真2は「位置取り局面」における動感志向形態の典型的な一場面である。位置取りの前景にあるものは、ディフェンスに対してどのような間合いであるか、ディフェンスから見えにくい位置であるかどうか、または感じ取りにくい位置にいるか、ディフェンスとディフェンスとの間が広がっ

ているかどうか、きっかけのときにずれて走り込める位置取りをしているかが主題になってくる。また味方と合わせて位置を取る必要性も含めなければならぬ。

動感意識としてチームとしての“狙いめ”に対する位置を取り、そのなかで対峙するディフェンスの視野外の位置を取ることが挙げられた。ディフェンスの視野外の位置とは、ディフェンスはボールと今どのように展開され、対峙するオフェンスがどこで何をしようとしているのかを同時に認識しなければいけない。そこでボール中心に認識しようとした時に、ディフェンスの視野外の位置が発生する。とりわけ45度のポジションにおいては、45度のディフェンスの視野外からのアウトを抜こうとするアウト割りの意識が作用されていると読み取れる。そして45度のディフェンスが対応して寄ることを寄ることを想定し、いつでもストップして内側に向かってセンターディフェンスを引っ張って二人引きつけようとする主導的な意識が読み取れる。

またバックコートプレイヤー自身がミドル・ロングシュートを打てるようにねらうための位置をとる意識も読み取れた。ここでは、ディフェンスとの間合いが大事になってくるので、自分が打つ歩数を先取りするような動感志向形態が観察される。



写真1 「ポジションに着く局面」における動感志向形態の一場面



写真2 「位置取り局面」における動感志向形態の一場面

3. きっかけ局面

写真3は「きっかけ局面」における動感志向形態の典型的な一場面である。ずれてディフェンスに入ることと対峙するディフェンスを抜くことを前景として、対峙しているディフェンス以外のディフェンスを引きつけ、味方とあわせながらオーバーナンバーをつくり、突破、シュートまで結びつけることが主題であるといえよう。

そこでは、ボールをもってきっかけに行く際は“強く”攻めて、意識的にディフェンスを誘い込んで引きつける意識が読み取れる。ボールをもっていない人の動きとしては、そのきっかけの次の継続あるいは突破局面のための走りこみやボールをもらう合わせ、ボールをもらった瞬間に動き、突破を試みる意識が読み取れる。きっかけからシュート局面に持ち込むよりは、きっかけから次の継続や突破で味方と合わせてシュートまでもっていきこうとする意識がチームとしての攻めかたとして読み取れる。

4. 継続局面

写真4は「継続局面」における動感志向形態の典型的な一場面である。継続はあくまで突破やシュートまで結びつけるための経過であり、常にシュートあるいは突破を狙おうとしたなかでディフェンスを引きつけてのパスを継続させていくことが目的として挙げられる。ただボールを回しているだ



写真3 「きっかけ局面」における動感志向形態の一場面

けでは突破やシュートまで結びつかない。当然、継続局面ではディフェンスを揺さぶって、私自身がディフェンスに対して常にずれている状態であることが望ましい。また継続局面ではオーバーナンバーをつくってシュートまで結びつけるための“ボールの流れ”というものが存在している。ディフェンスはボールの流れを先読みして仕掛けてきたり、予測的に守ろうとする。オフェンスはボールの流れからディフェンスの予測を裏切るためのチームとしての動きを試みようとする。そこではチームの“狙いめ”をもった切り返ししや、個人の即興的判断に基づく切り返し、あるいはフェイントを行い、突破またはシュートに結びつけようとするのが読み取れる。また継続局面では常に相手のディフェンスと味方の動きを先読みして継続しなければならない。とりわけ主導的にディフェンスをブロックして動くポストとのコンビを取りながら、速くパスを継続して突破を試みるのが読み取れる。

5. 突破局面

写真5は「突破局面」における動感志向形態の典型的な一場面である。突破ではディフェンスを抜きさり、シュートまで持ち込まなければならない。半身でもずれていたら強引に、切れ込む、または入り込むということが目標像になるといえよう。しかしシュートを打つこと自体が目的ではな



写真4 「継続局面」における動感志向形態の一場面

い。あくまでも得点をあげなければならないため、次のシュート局面に対して、しっかりとシュートを打てる体勢をつくらなければならない。そこには突破のための自我身体中心作用において足の運びかた、“もぐりこむ”ような体の入れかた、肩の入れかた、空中で体勢をとること、ディフェンスに接触しても体勢をつくらうとすることが読み取れた。

しかし突破をする際には、利き腕側に突破することと、利き手の逆側に突破することでは優勢化が働くため、そこでの動感意識は明らかに違うと思われるが、そこまで詳細な記述はなかった。

6. シュート局面

写真6は「シュート局面」における動感志向形態の典型的な一場面である。シュート局面では、キーパーとの駆け引きが主題となるといえる。そのためのシューターが駆け引きのために、キーパーにいい準備をとらせなかったり、キーパーのとりづらいコースを打てるということが前景になる。そのための動感意識としてとりづらいコースにしっかりと打ちきれることと、早い段階でテイクバックをして準備をしていることが大切になってくる。また突破をして防御を振り切った場合でのキーパーとの1対1の対決状況においては「決めうち」、キーパーの位置取りや動きかたに応じ、四隅や股下のコースを意識したシュート」、「キーパーが

四隅にボールを取りに行こうとしたコースに対して、動いて空くであろうコースを意識したシュート」、「打とうとするコースを投げるかたちを瞬間的に変化してキーパーを逆に動かそうとするシュート」、「防御を利用したブラインドシュート」などに分類されると考えられる。記述からではキーパーの位置取りや動きかたに応じて、先に四隅や股下のコースを意識したシュートを志向する傾向が強いと読み取れる。また今後さらに「シュート局面」に関する動感志向形態の分類することについて明らかにする必要があるであろう。

VI. まとめ

本研究では、プレイヤー、分析者ともにハンドボール競技における遅攻を自我身体にもとづく内的な意識や解釈を前景にして行った。記述から読み取れる同じ意味を分類して意味核と動感意識を見出し、分析者同士が間主観的に読み取って動感分析を行った。そして両者の視点を考慮して、意味核と動感意識を大局的にとらえて類的に普遍化することを試みた。

本研究で行った動感分析は指導者とプレイヤーが共に同じ考えや言語を共有して個人の動きやチームとしての動きを築きあげる過程が前提になれば分析することはできなかったと考える。そこにはお互いが各局面においてどのような意味を持ち



写真5 「突破局面」における動感志向形態の一場面



写真6 「シュート局面」における動感志向形態の一場面

合わせ、何を意識しているのかを感じ取りながら見極めなければ分析はできなかつたであろう。そして類的核を見出すには、プレイヤーからのなかからの記述、あるいは分析者が外から見抜いた動きの記述のどちらか一方だけでは、より深く掘り下げた動感志向性の分析はできないと思われる。そこには複数の価値や意味を読み取れることできる人間同士が間主観的に擦り合わせて行ったほうが、より厳密に分析できるであろう。本研究で行った動感分析は、プレイヤーと分析者の両者の立場から、動く感じを“擦り合わせて”分析を行い、普遍化することを試みるところに意義があったと考える。

また、プレイヤーは日頃から動く感じの視点を持ち、自己の動感をいつでも引き出してあげられることも大切である。例えば、ひとつ歯車が狂いだし不調になった場合、何をよりどころとすればよいのであろうか。そこでは最終的に自我身体に問う必要があり、自分自身の動きを再認化できるということが必要である。そして動感意識をより能動的に顕在化していくことができるのであれば、自我身体と動感意識のズレを擦りあわせ、動感を呼び起こして、いつもの自分自身の動きに結びつけられると思われる。このことは自分自身の動きを創発させていく上でも大事であると考えられる。

今後はプレイヤーが記述で明らかにできなかったことを、さらにインタビュー方式を用いて、より深く掘り起こして動感意識を明らかにしていきたい。

最後に、本研究で行った動感分析は、筆者自身の動きを見抜ける能力や文字言語呈示化能力が問われるものである。筆者自身、動感呈示能力が浅く、深い分析結果と考察までできたかどうかは課題が残るが、本研究の目的である類的普遍化した意味核や動感意識を一指標として示すことができたと思う。これらがプレイヤーや指導者に還元され、個人の動感感覚として溶け込まれ、指導や競技力の向上の一助になりえれば幸いである。

注1：原形象

生命あるものの多様多彩な現象のなかで、その同一性、単一性、普遍性を求心的に示すもの

引用・参考文献

- 1) Günther Stiehler・Irmgard Konzag・Hugo Döbler (監訳 唐木國彦)：ボールゲーム指導事典。大修館，1993。
- 2) Hüssel, E. (訳 浜渦辰二)：デカルト的省察。岩波文庫，2001。
- 3) Jan Kern (監訳 朝岡正雄)：スポーツの戦術入門。厚特社，1998。
- 4) Janice M. Roper・Jill Shapira (訳 麻原きよみ)：エスノグラフィー。日本看護協会出版会，2003。
- 5) 金子明友：わざの伝承。明和出版，2002。
- 6) 金子明友：身体知の形成 上。明和出版，2005。
- 7) 金子明友：身体知の形成 下。明和出版，2005。
- 8) Marlene Zichi Cohen・David L. Kahn・Richard H. Steeves (訳 大久保功子)：解釈学的現象学による看護研究——インタビュー事例を用いた実践ガイド——。日本看護協会出版会，2005。
- 9) 丸井一誠：小学生のためのハンドボールの系統的指導に関する事例研究——ゲーム様相の発展の運動分析を中心に——。秋田大学大学院 平成17年度修士論文，2005。
- 10) マイネル, K (訳 金子明友)：スポーツ運動学。大修館，1981。
- 11) Michael Polanyi (訳 佐藤敬三)：暗黙知の次元。紀伊国屋書店，1980。
- 12) 大西武三：ハンドボールのゲームにおける局面の構成について。筑波大学体育科系紀要20: 95 - 103, 1997。
- 13) 大西武三：ハンドボールにおける世界のトップレベルチームの戦術について——セットオフフェンスの戦術——。筑波大学体育科系紀要

21:63 - 75, 1998.
 14) 大西武三・佐藤 靖：ハンドボールの授業
 ― 戦い方を創作する ― . 新学習指導要領
 による高等学校体育の授業下巻. 大修館書店,
 pp78 - 103, 2001.

15) 佐藤靖：ハンドボールゲームの戦術の体系化
 について. 秋田大学教育文化学部教育実践研
 究紀要22:41 - 60, 2000.

16) 佐藤 靖：ハンドボールにおける意味構造の
 例証分析的一考察. 伝承 2 :71 - 92, 2002.

資料1 「目標像」についての記述

ポジションに着く

- ①DFのかたちで守っているか、どこが空きそうかを考える。
- ②DFの状況を見て、どこを攻めようか考えておく
- ③DFの崩しかたを頭に置く
- ④全体を見て位置に着く
- ⑤DFに近すぎず、遠すぎずポジションにつく
- ⑥ディフェンスの様子を見る
- ⑦DFのかたちを見て、どこを狙うか見る

位置取り

- ①コンビ・フォーメーションがとれる位置を正しくとる。DFを広げるためにアウトに開く
- ②DFに近寄りすぎず、アウト割りを意識しておく
- ③味方等を見て攻めるポイントを探す
- ④DFのかたちを見て攻め方を考える
- ⑤味方からパスをもらいやすい位置を取る
- ⑥視野外の位置取る
- ⑦ボールの流れを見て走り込める準備をする

きっかけ

- ①DFを広げて、逆の展開での1対1、ずらしを狙う
- ②アウトに切り込む前に、ボールをもっていない状態でしっかり準備する
- ③サインのねらい目をハッキリさせる
- ④ずれて入る
- ⑤DFをひきつける
- ⑥ディフェンスとディフェンスの間を攻める。間合いを考える
- ⑦味方からパスがもらえるようにコンビを取る

継続

- ①味方のポストとDFの状況を見て正確に判断する
- ②早いパス
- ③ボールをもらう前にDFの位置を見ておき、ずれた位置から攻めはじめる。
- ④間を攻めてDFを崩す
- ⑤DFの逆をつく
- ⑥常にシュートを狙う。パス回しを早くする。ミスをしない。
- ⑦ボール回しを早くする。1対1をしながらDFの間をねらう。

突破

- ①オーバーやチャージにならないように打ちかた、入り方をする。
- ②半身ずれている位置で切れ込む
- ③7mをもらいに行くような勢いでDFの間をねらう

- ④ずれたらシュートまで持ち込む
- ⑤強引に肩を入れる
- ⑥いけると思ったら強引にでもシュートまで持っていく。ポストとの合わせ
- ⑦ポストブロックを上手く利用する。

シュート

- ①スピードとコースを考える
- ②キーパーの動きをしっかり見る
- ③キーパーの動きを見ながらかけ引きをする
- ④キーパーの逆をつく
- ⑤腕を伸ばし、全身を使って振り切る
- ⑥かけ引きして打つ、タイミングをずらす
- ⑦キーパーをよく見る

資料2 「動感意識」についての記述

ポジションに着く

- ①ねらい目を攻めるためにその逆から強く攻めさせ、味方との関わりかたを考える
- ②味方と相談しながら位置取りを考えたり、できるだけDFを広げるようにする。全体をよく見れるようにする
- ③前の攻めからDFの動きを思い出して、攻めを考える
- ④全体を見る
- ⑤DFの形を見て判断する
- ⑥走りこみやすいところに立つ
- ⑦走り込みやすい所とシュートを打ちやすい角度のところに立つ

位置取り

- ①DFの視野外の位置からフローターのパスに合わせる位置取りをする
- ②低い位置をとり1対1（アウト気味から）をかけていく。
- ③ポストからのサインを確認し、攻めるポイント（ねらい目）に位置をとる
- ④DFの位置取りを確認して、自分の位置をとる
- ⑤DFに近すぎない間合いを取る
- ⑥相手が見えないところに動く
- ⑦できるだけ後ろに下がって（ミドル・ロング）シュート練習の時の位置を考える。

きっかけ

- ①攻めたいところの逆から味方を強く攻めさせどのように関わろうか考える。フローターがインに来た瞬間にアウトにいけるように合わせる
- ②それで3枚目をひきつけられるような動きをして、パスが出せるぎりぎりの位置までDFを寄せる。自分がDFを広げて、味方が1対1、シュート、ずらし、ができるようにする。
- ③自分がきっかけならばDFをできるだけ引き付けてボールをさばく
- ④DFとの間合い、距離を考えきっかけをつくる
- ⑤1対1を強くかける
- ⑥バックステップをしながら、タイミングを合わせる
- ⑦サイドの1対1から合わせる。ポストと練習の時のようにコンビをとる

継続

- ①動きながらもらえるように
- ②パスにスピード（早いパス回し）をつけ、相手に応じてプレーする。前を見て、ずれて
いるなら状況にあった入り方をして、ポストが空きそうならそこを狙う。DFをよく見る。
- ③止まらず動きながらボールをもらう
- ④DFとDFの間を攻めて、隣のDFをひきつける。
- ⑤オーバーステップにならないように何回か繰り返しを入れる。
- ⑥常に足を動かして、合わせておく
- ⑦足を動かしてボール回しを早くする

突破

- ①フォローが来る前に飛び込んでおく。
- ②体のバランスが崩れないようにきちんとした体勢で打つようにする。また間合いを考
える。
- ③躊躇せず、7mをもらいにいけるような勢いでDFの間を狙う
- ④パス回しの中でフェイントを使ってずれてたら、抜いてシュートを狙う
- ⑤体重を前にかけて、すぐシュート体勢をつくる
- ⑥どの状況が一番いいのかを判断する
- ⑦ポストの動きを意識しながら突破する

シュート

- ①四つ角、股下など取りにくいところに打つ
- ②バランスが悪いと決め打ちになってしまうから、それでもキーパーを見て正確なシュー
トを打つ
- ③DFと接触があってもしっかりとバランスを保つ
- ④逆を狙ったり、コースの徹底
- ⑤利き手の逆の肩をゴールに向け、体重を前にかけて力いっぱい打つ
- ⑥キーパーの様子を見る
- ⑦キーパーの気持ちになる。キーパーを見て腕の引きを考える

（平成20年2月20日受理）